

齋藤貢詩集『夕焼け売り』抄

夕焼けについて

不意を打たれて
身構えることすら
できなかつた、と。

背後から振り下ろ
された刃で
深い傷を負った
ひとよ。

暮らしを置き去り
にして

あられのような息
を吐きながら
ひとは暮らしている。

弔いの列車は

小さい火を点し
ながら
奪われてしまつた
一日を西の空へと
運ぶ。

車窓に幾たび、夕日
が沈んだこと
だろう。

列車は、沈む夕日
のかけらを拾い
集め

悲しみは、息を吹
きかけて西の空
で燃やそうとして
いる。

あの日から、この世
には痛みも、悲し
みもない。

怒りや憎らしたは
黒い袋に詰めこ
まれて

駅舎は、出た瞬間
を待っている。

片道切符を持って
改札口に入った
のは

津波の動きを
改札口に入つた
のは

列車が動き始め
ると

乗客は、車窓から
こちらに手を振
る。

やがて、西の空で
燃えてしまふと

苦しみにあか
らなげなる。

あつた時間は、軽
く始つていく。

耳を澄ますと、死
んだひとの魂のよ
うに

列車の汽笛は、死
んだひとの魂のよ
うに

ふさふさは、火に
包まれて

あかさは、夕焼け
のようか。

今も、夕焼けのよ
うに燃えている
のだろうか。

あの日、しんしんと雪が降って
海風も吹き荒れていて
強えながらかき荒れていて
凍えながらかき荒れていて
悔しいが、漏らした最期のひと言。
抜け出すとき、頭から離れない。
いまでも、頭から離れない。

燃えていながら／寒い火というものがある*

この詩人の目にも、末期の火が青白く見えていたのだろう。

火が、ほんとうに寒くない火だったからだ。

少し俯つむ、ゆつくりと目を閉じる。
ひとは、世は、たなひに、名を口にする。
あなちの火は、舌の触り、青白く凍えている。

いあひそ少
のなとれし
ちのの世、
火は、はな
は、も、た
舌、手、あ
上、り、な
で、も、の
青、面、名
白、影、を
く、も、口
凍、昔、に
えて、ま、す
る、と、の
ま、ま、に
に、立、ち
ち、上、が
上、る、の
が、だ、が

今も、行方知らずの具で引掻く。

あの日、炎と後悔の景色であることか。

* 三谷晃一詩集『野犬捕獲人』より

草のひと

あの日、縁が突然に欠けて

こらえきれずに、あふれる波となった。

ちぎれた空から落ちてくる水。

避難せよ。直ちに、避難せよ。

土に生きた草のひとは、迷っている。

どのようすればよいかもわからぬまま
幾度も、幾度も、山を越え、深川を渡った。

草の土地の根は、千々に乱れている。

かたつて、ここには無数の蕨がならび
集木の賑やかな日々が、いたはずなのに。

朽ちれることも、思ひ出を焦がしている。

あの日から頭うべをたれて戻ってくるが
死んだら嘆かやせない。満ちて

だから、草ひとよ。

こつとら、高に語れ。よ。
声を荒て、かに眠るためには
汚れた土を、置き去りにして、無防備ならぬ。
その地を、去りにしているのは、いったい誰か、と。

その無念を、ひとよ。

喘ぎ声で、よ。ひとよ。
限りなく遠く、語り続けるように

草の声や地の声が、
遠い声と、死んだひとの魂を鎮めるまで。

桃色の舌を垂らして

毛皮の身を包み、地をさまよう。
おれは、愚かな一族の末裔である。

嗅覚は鋭くなった。
足腰も衰えては嗅ぎ分け
敵を、瞬時に嗅ぎ分ける。

涎を垂らし、牙をむく
無頼な野生も、近ごろは身についてきた。

桃色の舌で滅びの味覚を
死戯れで愛でながら

おいちの快楽。れ端をひと息に呑み込むのが
おれは、罪深いことだろうか。

けもの快楽に身を委ねて
野蠻なおれを、生きる。

けものおれには、日常がある。

牙をむくから、どこか誰か
殺すてくれたのだと、どいつ
教えたの、殺戮をやめな

たつて、野牙をむかなくても
文と、野殺戮をやめないだろう。

愚かなけものだ、おれたちは。
その先に、いのちの未来がある。と信じている。

愚かな末裔だ、おれたちは。
けもの毛皮で身を包み、荒い息で涎を垂らしながら。

桃色の舌が、ヒリヒリと焼けるように痛い。
決して抜かぬ棘のようにつかぬ悔恨のように。

二度ととりかえしのかぬ悔恨のように。